

中ロ国境にヘジェ語を訪ねて

津 曲 敏 郎

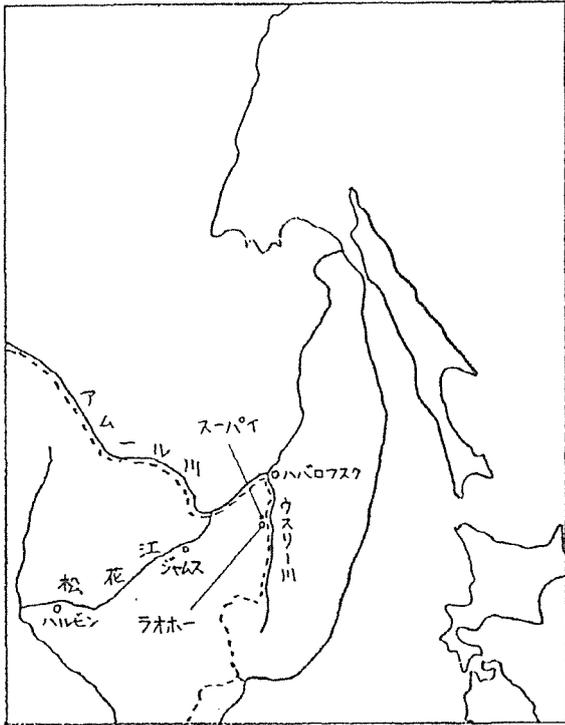
ヘジェ（ヘジェン、ホジェなどとも；中国では赫哲と書く）は、中国少数民族の中でも最少の部類に属する民族である。ロシアとの国境を流れる黒龍江（アムール川）とその支流松花江沿いや、もう一つの支流ウスリー川左岸などに住んでいる。十年ほど前（1982年）の統計では人口わずか1,500人足らずとされていたが、最近（1990年）では4,200人ほどの数があげられている。数の増加の背後には、中国全体としての人口増のほか、調査の不徹底、民族意識の高まり、あるいは少数民族を名乗ることの利害、などいろいろな事情が考えられよう。いずれにせよおもて向きの隆盛とは裏腹に、伝統文化や固有言語の維持はますます困難な状況に立たされている。もはやヘジェ語の流暢な話し手はわずかな老人だけであり、生活様式も圧倒的多数派である漢族とほとんど変わらない。

いっぽう、国境を過ぎてロシア領のアムール流域にも同じ民族がナーナイという名で分布している。こちらは人口12,000人、うち44%がナーナイ語を母語とする（1989年）。もちろんここでもロシア語による侵食が確実に進んでいるが、ヘジェと比べればはるかに活力を保っていると言える。ちなみにナーナイとは「土地の人」の意。まさにこの土地に獣を追い、川に魚を求めて自然とともに生きてきた彼らも、今や国境という、川よりも深い溝に自由な往来を妨げられているわけである。

ところでロシア極東の都市ハバロフスクを経て、河口までの流域はナーナイをはじめ、オルチャ（ウリチ）などのツングース系諸族の集中している地域だ。さらに河口のすぐ先に横たわるサハリンにもツングースの一つウイльтаがいて、その一部には戦後、北海道へ引き揚げて来た人々もいる。ちょうどアムールの氷が流水となってオホーツク沿岸にやって来るように、アムール流域からサハリンを経て北海道につらなる一本の道がある。まさにこの道に沿ってかつて蝦夷錦が運ばれて来たのであり、この「北のシルクロード」の主要な担い手がツングースの人々だったのである。

1989年度の冬と90年夏の二度に渡り、旧ソ連にナーナイの地を訪れて調査する機会があった。それ以来、国境によって分断された同族の民ヘジェを今度は中国側に訪ねてみたいと思っていたが、意外に早くその機会に恵まれた。ちょっと前までは、ソ連にせよ中国にせよ外国人によるフィールドワークはきわめて困難だったし、まして国境地帯とあれば夢物語に等しかった。それが今やあっけないほどに開放が進んでいる。

1992年8月、北京からハルビン（哈爾濱）へ飛び、そこから夜行列車で早朝ジャムス（佳木斯）に到着、さらに車にまる一日揺られてたどり着いたのが、めざす国境の町ラオホー（饒河）だった。ウスリー川をはさんで、対岸には旧ソ連の監視塔が見える。ロシアとなった今では、心なしか緊張感もうすく、こちら岸では人々が水遊びに興じている。ここラオホーとその隣村スーパイ（四排）は「ヘジェの村」として知られている。ここで数人のお年寄りからヘジェ語を聞かせることができた。その中にはすでに中国の学術報告にインフォーマントとして名を連ねている



人もいる。つまり「ヘジェの村」にしても、話せる人はもう数えるほどしかいないということだ。

初めて耳にするヘジェ語は、ソ連で聞いたナーナイ語とはいわば方言の関係にあるわけだが、そもそも同系の諸言語の中で、どこまでが「方言」でどこからが別の「言語」かを分ける明確な基準があるわけではない。いくつかの単語や簡単な文を聞くうちに、ナーナイ語とのいろいろな違いの方が耳についてきた。もちろんこんなことは、すでに双方の国から刊行されているそれぞれの言語の記述をつきあわせればある程度わかることだが、やはり自分の耳で納得するに越したことはない。その点では、国境のこちらとあちらの両方の地を踏む機会に恵まれた者としては、両者の比較は興味ある課題の一つとなりそうだ。

地元関係者の行き届いた配慮やヘジェの人たちの暖かい協力を得られて、調査はまずは順調にすべりだした。順調でない点があったとしたら、それはすべてこちら側の問題で、質問点がよく整理されていなかったり、こちらの意図をうまく伝えられなかったりという不手際だ。たとえば「私は頭が痛い」という簡単な文一つ言ってもらうだけでも、相手は「俺は頭なんか痛くない」とか「おまえ頭が痛いならいい薬をやろう」とか答えるばかりで、まさに頭の痛い思いをすることしばしばである。この素朴な話し手たちにとって、ことばは現実と不可分なのであり、むしろわれわれの方が実体のないことばに慣れすぎているのかもしれない、と反省させられる。こうした要領を得ない質問に答えるときよりも、話し手がいきいきと語ってくれるのは物語や昔話を自由に話すときだ。この貴重な過去からの伝承をいざ書きとめようとする、しかし、またしても悩まされる。話すそばからすらすら書き取ったり、理解したりできれば苦労はないのだが、一度通して録音したものをこまぎれに再生して、もう一度ゆっくり繰り返してもらおうとしても、そのつど言い方が変わるのだ。考えてみればこれも当たり前のことで、われわれにしても同じことを表現するのに一字一句違えずにしゃべることはむずかしいし、まして何度も尋ね直されればかえって別の言い方をしたくなるだろう。

こうした失敗と反省、挫折と開き直りの連続で、むしろ「順調」でないことの方が多かったが、これも貴重なデータと同じくらい得がたい成果と言うべきかもしれない。それと並んで、その土地の空気に触れたり、いろいろな人と出会ったりすることもフィールドならではの醍醐味であろう。ラオホーは、ウスリーのほとりから一本のびた中心街に役所や銀行、商店が並び、まわりを粗末な住宅がとりまいただけの小さな町だ。国境を思わせるものとして、ロシア文字を掲げたレストランがある。聞けばロシア人が来てやっているという返事で、もうそんな行き来が始まっていることに驚いた。そのほか中国在住の朝鮮族も多いらしくハングルの看板も目につく。そんな町並みに「カラOK」（カラオケ；漢字の国、中国がこんな書き方をするようになった）の看板を

見つけたときはさすがにびっくりした。今や中国の大都市には珍しくないが、こんな田舎にまでこんなかたちの「日本文化」が進出しているとは。早速、案内役の民族委員会の青年(自身ヘジェ族)に連れて行ってもらうと、なるほどカラオケ・スナック風の店内では先客がマイクを手になり立てている。香港や台湾からのビデオのようだ。簡体字と繁体字の歌詞が二段で流れていたりする。頭出しが厄介なのと本数が少ないのとで、客の要求に応じるというよりは、勝手に流して客が適宜あわせるというスタイルではあるが、まぎれもないカラオケだ。残念ながらわかる歌がないので、マイクだけを入れてもらって、歌合戦となった。日本の歌謡曲には中国で知られているものも多いので、へたでも喜んでもらえるのはありがたい。同行の通訳氏は蒙古族出身で、草原にしみ渡るようなすばらしいのどを披露してくれた。ヘジェの青年も「意味はよくわからないが」と前置きしてヘジェ語の叙情歌を歌ってくれた。そこへたまたま例のロシア・レストランの店員とおぼしきロシア女性が来て、ロシア民謡が加わり、三ヶ国五民族(漢、蒙、ヘジェ、ロ、日)の入りまじった歌声に国境の夜はふけていった。

ロシア・アムール流域を訪ねたときもそうだったが、今回の旅でもほとんどはじめての外国人研究者として訪問・調査を許されたばかりでなく、関係機関の最大限の便宜と、地元の人々の暖かい協力を得ることができた。もちろんそれなりの手続きを踏む必要はあるし、それがいつもスムーズに運ぶとは限らない国柄だが、全体として歓迎の方向にあることは素直に喜ぶたい。しかし逆の立場で考えればどうだろうか。平穏な日常にへんな外国人が闖入して、忘れかけていることを根ほり葉ほり聞き出し、なにがしかの金品は置いていくにしてもたいはそれっきりだ。受け入れにあたる役所にとっても、余計な仕事がふえるばかりで何の得があるだろう。何事もなければ幸いで、へたをすれば国際問題にもなりかねない。確かに、末端の機関や個人が中央や地方政府の意向をあえて拒むことはないのかもしれない。しかし直接に接する地元の人たちの親切心に義務感は感じられなかった。あるいは地元にも、ひょっとして日本人観光客の呼び水になるのでは、という期待がないとは言えない。現に、行く先々で豊かな自然を売り物に一樣に観光への熱い期待を聞かされもした。しかし未整備な交通や宿泊の現状と、開発の代償に失われるものを考慮すれば、観光がそう簡単に地域振興のカンフル剤になれるわけではないことくらいわかるはずだ。せいぜい言語学者や民族学者が気まぐれに訪れるくらいで、思うようにお金も落とすてはくれないだろう(むろん観光客や調査団、取材班が大挙して押し寄せ、金品をばらまくようなことにでもなれば、それはそれで新たな問題を生むだろう)。

そんなふうを考えれば、どうたたいても何も出そうにない一介の言語学者を無条件に村をあげて歓迎してくれるというのは実は大変なことなのだ。「大国」の日本にそれができるだろうか。あるいはわれわれ一人ひとりにその気持の余裕があるだろうか。開放の恩恵に浴し、歓迎に甘えるだけでなく、外国の研究者としてその国や人々に何が返せるのか、真剣に考えなければならぬときが来ている。